

麦 作

平成27年産 小麦の総括

北海道農政部生産振興局技術普及課 北見農業試験場駐在

上席普及指導員（農業革新支援専門員） 三宅俊秀

平成27年は、春の融雪が全般に早く、加えて4月以降、天候に恵まれ生育が良好であった。出穂期以降は、気温が低めに推移したことから、登熟期間が平年より長くなった。また、生育に応じた栽培管理に取り組まれたことから、10a当たり収量は過去最高となった。

北海道の平成27年産小麦の収量（農林水産省大臣官房統計部公表）は、秋まき小麦628kg/10a（平年対比144%）、春まき小麦327kg/10a（平年対比113%）となった（表1）。

「きたほなみ」の収量は、穂長は平年並で穂数は平年並からやや多くなったが、登熟期間が長く日照に恵まれたことから、千粒重も大きく製品歩留まりも高かった。

品質では、ホクレン扱い分による秋まき小麦の1等麦比率は97.3%、春まき小麦は91.7%となり、小麦全体では過去5年間で最も高かった（表2）。

表1 平成27年度産小麦の作付面積と収穫量（北海道）

区分	作付面積 (ha)	収量 (kg/10a)	平年収量 (kg/10a)	平年比 (%)	前年比 (%)
秋まき小麦	107,300	628	436	144	135
春まき小麦	15,300	327	290	113	99

注1) 農林水産省大臣官房統計部公表（平成27年11月17日）

注2) 平年収量は過去7年の豊凶年を除く5年平均

表2 麦類検査実績の推移

品種名	1等麦比率(%)				
	H23年産	H24年産	H25年産	H26年産	H27年産
きたほなみ	79.2	89.2	81.9	99.5	98.7
ゆめちから	—	72.8	68.1	80.0	88.2
キタノカオリ	81.3	73.2	96.6	97.0	99.8
きたもえ	9.7	61.9	84.4	79.4	31.2
ホクシン	69.8	77.3	—	—	—
ホロシリコムギ	78.5	86.9	—	—	—
タクネコムギ	79.0	86.8	—	—	—
秋まき小麦計	78.7	88.7	81.4	98.0	97.3
春よ恋	76.1	83.5	93.7	51.8	90.4
はるきらり	85.4	88.8	91.1	89.4	99.3
ハルユタカ	79.8	72.1	91.4	89.3	94.8
春まき小麦計	77.4	83.7	93.1	59.0	91.7
普通小麦計	78.8	88.4	82.3	94.1	97.3

注) ホクレン扱い分

表 3 「きたほなみ」の品質 (平成22~27年産)

分析項目	H23年産	H24年産	H25年産	H26年産	H27年産	基準値	許容値
容積重(g/l)	851	858	856	863	866	840以上	-
F. N. (sec)	409	398	376	425	418	300以上	200以上
タンパク(%)	10.7	10.8	11.1	12.0	11.1	9.7~11.3	8.0~13.0
灰分(%)	1.49	1.41	1.39	1.41	1.31	1.60以下	1.65以下

注 1) ホクレン扱い分

注 2) 項目別加重平均値

また、品質ランク区分では、一部の地域でタンパク含有率が高かったことから基準値を超えたが、ほとんどが基準値内であった (表 3)。

以下、生育経過を振り返りながら今後の栽培を考えていきたい。

1 小麦の生育経過

(1) 秋まき小麦

は種期は、9月20日で平年より3日早かった。その後、気温はやや低温で推移し、10月15日の生育は空知、石狩で平年を上回ったものの概ね1~2日遅れとなった。

融雪が早かったことから、起生期は4月6日(早4日)となり、特に道央では7~10日早まった。雪腐病の発生は全道的に少なく被害面積率は1.9%であった(北海道病害虫防除所調べ)。また、一昨年十勝地域で問題となった凍上による根浮きの被害も軽微であっ

表 4 平成27年産 秋まき小麦の生育状況

振興局	は種期 (月日)	起生期 (月日)	幼穂形成期 (月日)	止葉期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)
空知	9.16(早5)	4.01(早11)	4.30(早7)	5.24(早7)	6.01(早7)	7.18(早2)
石狩	9.20(早1)	4.10(早9)	5.03(早9)	5.24(早9)	6.04(早7)	7.19(早3)
上川	9.14(早4)	4.10(早7)	5.03(早7)	5.25(早7)	6.03(早6)	7.19(早1)
オホーツク	9.23(早2)	4.11(±0)	5.03(早5)	5.27(早7)	6.05(早5)	7.26(早2)
十勝	9.23(早2)	4.04(早3)	5.01(早3)	5.25(早7)	6.02(早8)	7.20(早3)
全道	9.20(早3)	4.06(早4)	5.01(早6)	5.25(早7)	6.03(早3)	7.21(早3)

振興局	茎数の推移(本/m ²)			7月15日の生育状況			※千粒重(g)
	10.15	5.15	6.15	稈長(cm)	穂長(cm)	穂数(本/m ²)	
空知	485(156)	1,344(98)	814(106)	84(107)	9.4(102)	787(115)	40.5(38.8)
石狩	353(148)	1,409(107)	800(115)	76(96)	8.9(99)	706(114)	40.5(38.8)
上川	395(90)	1,300(119)	849(127)	80(106)	9.1(105)	781(133)	42.4(39.8)
オホーツク	198(90)	1,427(90)	829(98)	78(97)	9.1(100)	718(97)	43.8(37.8)
十勝	190(90)	1,500(91)	762(95)	79(96)	9.1(99)	681(98)	40.8(39.0)
全道	248(104)	1,428(95)	796(101)	79(99)	9.2(101)	716(104)	-

注 1) 各農業改良普及センター調べ

注 2) 各生育期節の()内は平年対比の日数

注 3) 茎数・穂数の()内は平年対比の百分率(%)

注 4) 千粒重は各農試(中央、上川、北見、十勝)の奨励基本調査及び現地調査から(平年は過去10年間の基本調査の「きたほなみ」単純平均)

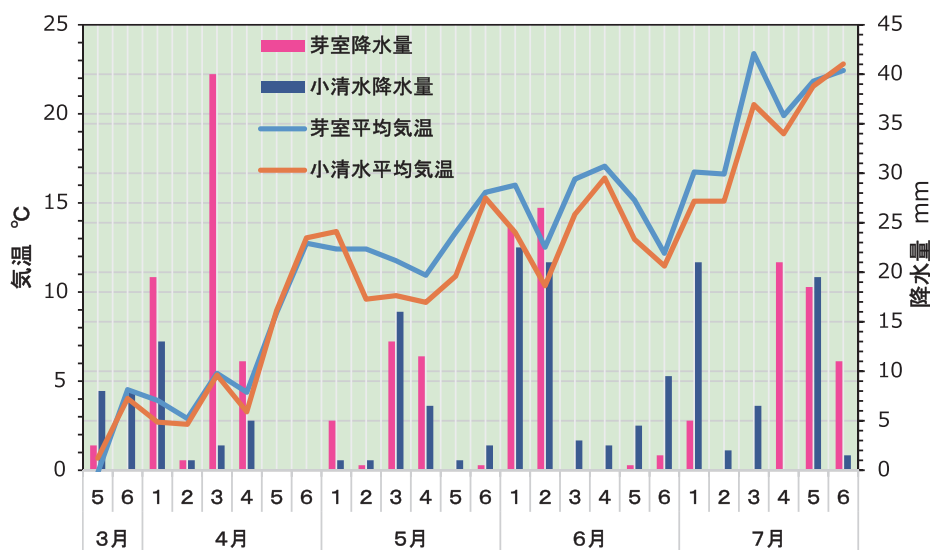


図2 平成27年3～7月の芽室町と小清水町の平均気温と降水量
(アメダスデータ)

た。

気温は、4月中旬までは平年並で、以降6月中旬まで高温で経過した。降水量は、道東では少雨傾向、道央道北では多雨傾向で推移し、特に十勝では、4月下旬から7月中旬まで著しい少雨となった。

幼穂形成期は、平年より6日、止葉期、出穂期は平年より7日早まった。

成熟期は、6月下旬～7月中旬の低温傾向により、平年より3日早い7月21日となり、登熟期間は平年より4日長い48日間となった。

成熟期の稈長は平年並で、穂数は平年よりやや多くなった。地域別では道央道北で稈長が長く、穂数は平年を上回っていた。また、十勝・オホーツクでは稈長は短く穂数はやや少なかった。

収量は、登熟期間が長く日照に恵まれたことから全道的に多収となった。品質では、一部タンパク含有率が高い地域もあったが、FN（フォーリングナンバー）、容積重、灰分とも良好であった。

越冬後の病害虫の発生状況は、アブラムシ類、赤さび病、赤かび病等の発生は全般に少なかった（北海道病害虫防除所調べ）。春先の茎葉黄化症状は、平年より多く散見されたものの、春期の生育が進んだことから症状の

消失も早く、影響は限定的であった。

(2) 春まき小麦

平成27年の種は、は種始4月16日（±0日）、は種終わり4月27日（遅1日）となった。道央では、融雪が早かったことから、作業は順調に進んだが、オホーツクでは、ほ場の乾燥が進まず、は種期が平年と比較して遅くなった。

気温は、4月中旬以降～6月中旬までは概ね高温で推移したことから、出芽期は5月2日（早2日）と早まった。出芽の状況は、平年並みからやや良であった。また、降水量は、道東では少雨傾向、道央・道北では多雨傾向で推移し、特に十勝では4月20日以降から7月中旬まで著しい少雨であった。

止葉期は6月11日（早4日）、出穂期は、6月20日（早3日）となった。

6月下旬～7月上旬は低温傾向で推移したため、成熟期は8月6日（早2日）となった。

登熟期間は、平年より1日長い45日間であった。成熟期における稈長、穂長は、平年と比較して長かった。穂数も平年を上回った（平年比114）。一部過繁茂などとなったほ場では、倒伏が見られた。

収穫作業は、平年並～やや早まったが、降雨の影響もあり2～3日遅れで終わった。

表 5 平成27年 春まき小麦の生育状況

栽培様式	振興局	は種期 (月日)	出芽期 (月日)	幼穂形成期 (月日)	止葉期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	成熟期の		
								稈長(cm)	穂長(cm)	穂数(本/㎡)
春まき	上川	4.14(早8)	4.28(早7)		6.09(早4)	6.18(早4)	8.05(遅2)	93(100)	9.9(116)	610(112)
	留萌	4.19(早6)	5.05(早6)	5.30(早3)	6.13(早3)	6.23(早2)	8.09(遅4)	94(105)	9.0(106)	653(109)
	オホーツク	4.24(早5)	5.02(早2)	5.29(早3)	6.12(早3)	6.23(早3)	8.07(遅3)	83(98)	8.3(100)	671(113)
	平均	4.22(早2)	5.02(早2)	5.29(早3)	6.11(早3)	6.22(早3)	8.06(早2)	86(98)	8.6(103)	660(112)
初冬まき	空知	11.09(早2)	-	5.07(早7)	5.25(早6)	6.04(早6)	7.26(早1)			
	石狩		-	5.02(早14)	5.27(早8)	6.11(早5)	7.27(早1)			
	平均	11.09(早2)	-	5.06(早8)	5.25(早7)	6.04(早6)	7.26(早1)			

注1) 各農業改良普及センター調べ

2) 各生育期節の()内数値は平年対比の日数

3) 稈長、穂長、茎数・穂数の()内は平年対比百分率(%)

収量は登熟期間が長く、日照時間も長かったことから、多くの地域で平年を上回った。品質は一部子実蛋白含有率が高かった地域もあるが、FN（フォーリングナンバー）、容積重、灰分とも良好である。

病害虫の発生状況は、アブラムシ類、赤さび病、赤かび病等の発生は全般に少なかった（北海道病害虫防除所調べ）。

3 次年度に向けて

「きたほなみ」は、総粒数が一定以上多くなると、登熟条件が不良となった場合に製品歩留まりが低下する。倒伏を回避し、安定した麦づくりに向けて、あらためて、品種特性に応じたは種期・は種量・は種法及び生育に応じた施肥法について確認いただきたい。また、道東地区では2年連続で春～夏期間に少雨の影響を受けた。ほ場の保水性の向上と根張りの確保に向け、有機物施用等による地力の向上と土壌pH等の適正化に努める。

また、病害虫については、ほ場観察に努め適期防除の励行と適正な輪作体系を図ることが重要である。